講演会「地域高齢者の食べる楽しみを支援する」　午前の部　演題１

社会連携の必要性～食をキーワードにした活動～

株式会社瀬尾医療連携事務所
代表取締役　瀬尾　利加子

わたしと医療連携の付き合いは2002年、200床未満の一般病院に入職し、「専任が居なくて運用が出来なかった。あとはよろしくね」という指示を受け、地域医療連携室に配属されたことから始まった。院内外の業務も確立されていない状況から孤軍奮闘し、山形県庄内地区の16病院を対象とした“庄内地域医療連携の会”、ケアマネジャーや施設を含む“鶴岡市医療と介護の連携研修会”、病院と調剤薬局の薬剤師を対象とした“つるやくネットワーク”、病院勤務医と診療所医師の“南庄内在宅医療を考える会”、そして2010年には病院や施設、配食などの管理栄養士と調理師等との“南庄内栄養と食を考える会”の立ち上げと運営に関わってきた。しかし、超高齢社会と人口減少という社会の構造から起きる問題は、既存の多職種連携だけは対応しきれないと感じた。

そこで、2015年からは企業や自治会等といった社会との連携である「社会連携」に取り組んでいる。医療介護に興味を持ちにくい非医療者を巻き込むキーワードを考えたとき、「食」は生まれてから最期まで、健康な時もそうでない時も誰しも関わる事であり、興味関心を得やすい。

今回は、嚥下障害の課題に対し、管理栄養士やレストラン調理師、産直社員と共に取り組んでいる「鶴岡食材を使った嚥下食を考える研究会」を事例に、社会連携のつくり方について述べる。

【講師略歴】
瀬尾　利加子（せお　りかこ）
1969年１月　山形県鶴岡市生まれ
2002年１月　庄内医療生活協同組合入職・鶴岡協立病院　地域医療連携室配属
2006年４月～庄内地域医療連携の会　世話人・事務局長
2007年度～2012年度　南庄内緩和ケア推進協議会地域連携ワーキンググループメンバー
2007年度～2009年度　厚生労働省科学研究費補助金　第３次対がん総合戦略研究事業
「緩和ケアプログラムによる地域介入研究」地域連携グループ
2008年４月～全国連携室ネットワーク連絡会　鶴岡事務局
2009年　東北７県医療連携実務者協議会　代表世話人
2013年度～2014年度　南庄内緩和ケア推進協議会　地域医療連携ワーキンググループリーダー
2015年４月　（株）ストローハット（Net4U運営会社）入社・新規事業開発チーム配属
2015年５月　特定非営利活動法人全国連携実務者ネットワーク理事
2015年８月　連携コワーキングスペースみどりまち文庫開設
2017年８月　（株）ストローハット退社
2017年９月　（株）瀬尾医療連携事務所設立　代表取締役
2018年２月～鶴岡市総合計画審議会企画専門委員会委員
2018年５月～鶴岡食材を使った嚥下食を考える研究会代表

【執筆】
コープ出版　日本医療生活協同組合　医療部会編　「これからの地域医療連携」
2008年、2009年　日総研　地域連携network連載「ようこそ！連携何でも相談室へ」
2013年CBニュースWEB版　地域連携のいまとこれから（6）

【セミナー】
2009年、2010年　日総研　地域連携室運営のポイントと担当者の役割（初級者向け）他

講演会「地域高齢者の食べる楽しみを支援する」　午前の部　演題２

生ききるをともに～フレイル予防と地域一体型食支援～

株式会社　とよみ
代表取締役　小川　豊美

［はじめに］

当社のある鶴岡市の人口は１２８，８９９人（２０１７年８月末)、高齢化率は３１．３％と全国７番目に位置する。今後高齢化が更に進む事から地域完結型による支援が重要となってくる。地域での医療・介護が抱えている問題は病院・介護事業者のものだけではなく、地域の異分野・異業種をふくめた「ソーシャル」な課題である。その課題を解決するために同・多職種と連携して地域の健康教室や訪問・外来・入院の食支援を実践している。

依頼の内容は、①地域でより健康に暮らすためのフレイル予防の為の食支援。②認知症で食事がなかなか食べられない、食形態が合わない、各疾患、誤嚥性肺炎で入退院を繰り返すケース・終末期の食事。又、介護者さんからの直接「食事が摂れなくて困っている」「何を食べさせたら良いか分からない」「退院時の栄養指導はあったものの実際に作ることが難しくて教えて欲しい。」等の訪問栄養指導。訪問依頼は主に、訪問看護師、リハ職、が多く、次いで医師・ケアマネである。

※地域一体型の食支援

１．同（栄養士）・多職種連携の強化

＃１．地域の食に関する困りごと。誤嚥性肺炎と食支援。：平成 26 年度南庄内食と栄養を考える会で構成する同・多職種が中心となり食形態検討委員会（医師・歯科医師・管理栄養士・看護師・言語聴覚士・調理師）を立ち上げ食形態パンフレットを発刊した。各種研修会の前段に紹介する機会を設けてもらいながら周知を図った。又、歯科医師から口の機能や構造・医師から摂食・嚥下障害についての講義を頂きながら理解を深めると同時に、試食・調理実習を行い「ソフト食」の感覚のすり合わせを行った。

＃２．同行訪問支援活動：山形県栄養士会と酒田地区歯科医師会在宅歯科支援事業に於ける同行訪問食支援は平成 26 年から活動させて頂いている。在宅主治医からの照会で主治医・看護師・歯科衛生士・歯科医と同行訪問を行った。介護支援専門員等から相談があり歯科医師・歯科衛生士と同行訪問を実施している。

＃３．たべるを支援し隊（在宅ＮＳＴ活動）：鶴岡地区医師会ほたるを事務局に置き、歯科医師会・薬剤師会・栄養士会・機関病院・リハ病院・訪問リハからなる構成メンバーで在宅ＮＳＴ活動を今年度から実施している、一団体・一職種では問題を解決できない事を、地域全体で取り組んでいる。「食べられるのに食べられない」等色々な問題を抱えている中、支援メンバーでチームを組み在宅・施設等を訪問し問題解決へ繋げる「腕」の見える活動が更に必要である。

［まとめ］

最期まで「口から食べられる・住み慣れた地域で生活できる」へ繋げる事が我々に課せられた使命である。更に社会連携に於いての「生ききる」を共に考え一緒に活動する事がまさにフレイル予防となると確信している。特別な事ではなく役割を持ち心地よく暮らせる地域づくりへ微力ながら今後も携わっていきたい。

【講師略歴】
小川　豊美（おがわ　とよみ）
1986 年　鯉渕学園（こいぶちがくえん）　生活栄養科　作物保護特研　卒業
1987 年　（協）山形給食センター勤務
1990 年　管理栄養士資格取得
1991 年　庄内余目病院　栄養科　副科長
1995 年　特別養護老人ホーム勤務
1996 年　鶴岡市内開業医に勤務
2002 年　庄内まちづくり協同組合　勤務
＊2007 年から介護支援専門員　業務に携わる
2010 年 3 月　同法人退職
2010 年 4 月～　合同会社　とよみ管理栄養士事務所開設
2010 年 5 月～　指定居宅支援事業所　ケアプランセンター大地
2011 年 3 月～　株式会社　とよみ設立　代表取締役
2011 年 11 月　オープンハウス奏（かなで）開所
高齢者通所介護
認定栄養ケア・ステーション・地域交流センター
指定居宅支援事業所　ケアプランセンター大地
有料老人ホーム「ひいらぎ」2012 年 12 月オープン
2015 年～ 2017 年（公）日本栄養士会認定栄養ケア・ステーションモデル事業認定
2018 年～（公）日本栄養士会認定栄養ケア・ステーション

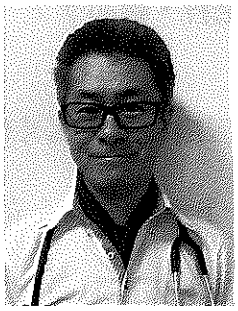
【主な役職等】
2009 年～2013 年 3 月　（社）山形県栄養士会理事
2009 年～2013 年 3 月　鶴岡地区栄養士会　会長
2008 年～2014 年 3 月　鶴岡市介護保険ケアプラン検証会議委員
2008 年～2012 年　鶴岡市介護予防事業推進専門家会議委員
2010 年～2016 年 3 月　庄内プロジェクト　栄養連携チーム　チームリーダー
2012 年～2013 年　（社）日本栄養士会　全国地域活動協議会役員
2015 年～（公）日本栄養士会認定栄養ケア・ステーション事業認定委員

【主な資格等】
管理栄養士　・　生活改良普及員
介護支援専門員
食育インストラクター
国際薬膳食育師 3 級
在宅訪問管理栄養士

【学会所属】
（公益社団）日本栄養士会
（一般社団）日本在宅栄養管理学会
日本介護支援専門員協会

講演会「地域高齢者の食べる楽しみを支援する」　午後の部　演題１

診療所から始める「最後まで口から食べるにこだわる」多職種連携



医療法人八事の森　杉浦医院
院長　森　亮太

【目的】

誰もが住み慣れた町で、人生の最期まで自分らしい暮らしを送れるよう「地域包括ケアシステム」の推進が謳われて久しい。杉浦医院では午前と夕方の診療の合間に訪問診療を行っている。当院で実践している、医師と訪問管理栄養士を含む多職種連携で支える在宅医療のかたちと、最期まで口から食べることを支えるための連携の仕方について報告する。また、栄養ケアステーション「はらぺこスパイス（以下、はらスパ)」で行う訪問管理栄養士の地域での活動について報告する。

【方法】

当院での訪問診療は看護師の同行はなく、管理栄養士をはじめ、理学療法士、言語聴覚士、事務職および薬学部学生が同行している。訪問先で必要があれば、訪問看護をはじめ、訪問リハビリテーション、訪問栄養指導の介入も指示する。訪問診療に同行している職種のスタッフと、訪問中にその場で相談して介入の必要性と、そのスタッフが患者さんに対して何ができるかを明確にできる。さらに普段から訪問に同行しているので、本人や家族と顔の見える関係ができているので、スムーズに介入ができる。それぞれの職種の専門性を生かして患者さんに関わることで、個々の患者さんにとってのベストな状態を作っていくことが可能となる。一人当たり平均月に2.5回の訪問診療以外にも、それぞれの職種からの報告も受ける。このため、個々の患者さんの生活を包括的に見ることができ、変化があれば迅速に細やかな対応が可能となる。栄養ケアステーションとしては、訪問栄養指導に加えて、三重県津市および愛知県大府市で低栄養フレイル重症化予防のための栄養パトロールを実施している。また、フードデザート問題にも取り組んでいる。

【結果】

訪問診療する中でその方の最期の希望を聞いておくことで、例え入院してしまっても、最期を家で過ごしたいという希望や、最期まで口から食べたいという希望がある患者さんであれば、病院主治医に退院させていただくように調整を図ることも連携の一つであると考える。その場合には緊急退院を促すようなことが実際には起きてくる。退院前カンファレンスにも、普段同行している他職種のメンバーができるだけ多く参加するようにしている。お家に帰ってからの支援をより具体的に検討するためである。はらスパの活動としてでは、まず第一にその人にあった食事の形態や、調理法、摂取量などを気軽に相談し、支える訪問栄養士としての活動が挙げられる。また、75歳以上の健診未受診者かつ医療未受診者に対して突撃訪問し、一人ひとりの「あなたの夢」について聞きだし、その夢をかなえるために必要な食事について介入することで、低栄養(フレイル)になっても安心した暮らしを可能にする栄養パトロールを行っている。さらに私が相談医としてかかわるホームレスの健康診断会において、当事者にの食生活に気を配ったお弁当作りおよび栄養相談を行っている。

【考察・結語】

地域包括ケアの充実のためには、訪問管理栄養士も含めて多種多職種と連携し互いが顔の見える関係で、個々の患者さんをその専門性を生かして協力し合うことが重要である。

【講師略歴】
森 亮太（もり　りょうた）／1970年生
医療法人八事の森 理事長・杉浦医院 院長　／専門：内科・小児科・緩和ケア

1998年に名古屋市立大学　医学部卒業。
淀川キリスト教病院で内科・小児科から救急、ホスピスでの緩和医療まで幅広く研修。
その後、名古屋市立東市民病院で外科医として勤務。
国立療養所恵那病院（現市立恵那病院）では、NST（栄養サポートチーム）を立ち上げる。
名古屋共立病院、第1なるみ病院を経て、2010年4月から杉浦医院の副院長を経て、2011年1月より杉浦医院院長となる。

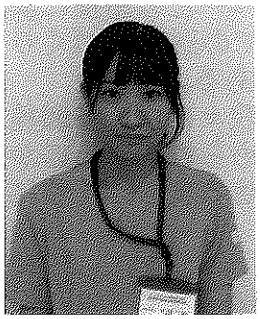
【所属学会・資格】
・日本内科学会
・日本外科学会
・日本プライマリ・ケア連合学会

【その他】
・NPO法人ささしまサポートセンター 理事長
・名古屋労災職業病研究会 代表
・NPO法人外国人医療センター 理事
・八事商店街振興組合　理事
・愛知県保健医協会　理事
・名古屋市医師会　理事
・Bar　&　Bistro　MASSA　オーナー

【著書】
・長寿大国日本と「下流老人」　幻冬舎メディアコンサルティング

講演会「地域高齢者の食べる楽しみを支援する」　午後の部　演題2

住民の「得意」を活かせ！～食の社会的問題を解決し、まちのフレイルを防ぐ～



まんのう町国民健康保険造田歯科診療所
丸岡　三紗

「肉や魚を食べろと言われても、足がないけん手に入らんのじゃ！」
「独りぼっちで食事したって、なんちゃ美味しない。」

歯科診療所で出会うフレイルの高齢者たち。その原因は、彼らを取り巻く「社会環境」にあった。いくら意識変容させようと指導しても、本人の努力だけではどうにもならない。

香川県まんのう町琴南地区は県内一、二位を争う過疎地域。この地域では当初在宅医療介護の体制がまったく整っておらず、当歯科診療所の所長の呼びかけによって「琴南の在宅医療介護の連絡会」が立ち上がった。そこで出会ったのは、「なた」を片手に命がけで山奥を訪問するヘルパー＆デイサービスに、一人暮らしの認知症高齢者の家で布団を干す（そして取り込む）薬剤師、山奥どこにでも訪問してくれるリハビリ職、薪で風呂を炊く看護師…など、どこか珍妙な（？）専門職ばかり。他にも、ごみ捨てや電球交換など生活支援なら何でもやる民間の宅配お弁当屋さんに、家族以上に世話焼きな民生委員、認知症高齢者の金銭管理を行う近隣住民など、専門職以外のメンバーも大活躍。地域包括ケアとは、「専門職も非専門職も関係なく、すべての住民のことを地域の強いつながりで守ること」なのだと感覚的に理解した。彼らは皆、「住民の暮らしを守り続ける」という共通のビジョンを持ち、同じ方向を向いていた。

会を重ねるごとに「互いに何でも言い合える関係」が築かれ、在宅医療介護の体制は順調につくられていった。一方で、普段どちらかといえば健康な人と接することの多い歯科の立場としては、誰もが自分らしく健康に暮らせるまちをつくるには、そこに介護予防・生活支援の視点を取り入れることが重要だと思うようになった。

しかし介護予防教室でいくら健康教育や機能訓練を行っても、関心を持ってくれるのはインテリジェンスの高い一部の特殊な層だけ。本当に予防が必要な住民には届かない。やはり買い物困難や孤食といった、フレイルの根本的な要因である社会的問題を解決しなければ、真の地域包括ケアは構築できないと感じた。

当然、これらは医療介護だけでは解決できない問題であった。調査の結果をもとに行政や商工会に提言しても、「過疎地域は採算が合わない」と言われる。住民も含め、地域全体に「諦め感」が漂っていた。

そんな中唯一立ち上がったのは、連絡会のメンバーの一員である民間のお弁当屋さんだった。彼女は、「60～80代の元気な高齢者を集めて有償ボランティアとして活動する仕組みを作れば、何とかなるかもしれない。医療介護専門職が一丸となって応援してくれるこのまちなら安心だ」と言い、自らコーディネート役を名乗り出た。こうして「ことなみ未来食工房」が発足し、まちづくり専門家や行政、民生委員や専門職らがまちぐるみでこの住民組織を支援するようになった。

まず開始したのは配食・見守り活動。現役の新聞配達屋さんが仲間入りし、山の頂上にも毎日弁当が配達できるようになった。高齢者の見守りを行うのは、元介護士。調理のパートを長年経験したベテラン主婦達が美味しい弁当をつくる。元利用者だった80代の方もメンバーに加わり、調理場の横の畑で野菜づくりの極意を皆に教える。住民たちがこれまでの人生で培ってきた「得意」が活かされ、生きがいを持って活動している。医療介護専門職と民生委員の協力により、利用者は現在80名近くとなっ

た。利用者は「話し相手ができて嬉しい！」と、驚くほど元気になっていく。
　その後弁当だけでなく、移動手段のない歯科受診患者を車で運んでくれるようになった。(最強のオーラルフレイル対策だと思う)。他にも、スーパーとの連携による御用聞きや元バス運転手による買い物&外食ツアー、中学校跡地での居場所づくりなどを企画中であり、地域が少しずつ前向きな雰囲気へ変わりつつある。
　住民の健康や暮らしは、決して医療の力だけでは守れない。我々には、多職種連携を超えた「社会連携」によって「支援者を支援する」姿勢が求められているのかもしれない。それが「結果」として、誰もが健康に自分らしく暮らせるまちづくりにもつながってゆくのではないだろうか。

【講師略歴】
丸岡　三紗（まるおか　みさ）
2013 年　四国学院大学専門学校　歯科衛生科卒業
　　三豊総合病院企業団　歯科保健センター勤務
2015 年　まんのう町国民健康保険造田歯科診療所勤務　現在に至る
2017 年　徳島大学大学院総合科学教育部博士前期課程　地域科学専攻地域創生分野
　　在学中（地域計画学研究室/田口研究室所属）
　　香川県歯科医療専門学校衛生士科　非常勤講師

【所属学会】
日本歯科衛生士会、日本老年歯科医学会（認定歯科衛生士）、日本口腔衛生学会、日本公衆衛生学会、日本プライマリ・ケア連合学会、農村計画学会

【社会活動】
NPO 法人お口の健康ネットワーク　理事
NPO 法人日本フッ化物むし歯予防協会　会員

【著書】
歯科衛生士のための口腔機能管理マニュアル―高齢者編―（分担執筆　医歯薬出版，2016）